

世論調査は「民意」を正しく反映するか

社会A班：阿部紗也加 飯塚万喜子 川田一貴 高田麻里子
富永祐丞 吉岡裕子 大向諒真 楠本舞佳
阪田かおる 上甲知佳 村尾愛美

1. はじめに

新聞やテレビで「世論調査」の名で「民意」が報道されることが多い。しかし、その調査に答えた人は本当に問題の本質がわかって回答しているのだろうか。また、アンケート調査は、回答者の思いを正しく反映したものになっているのだろうか。アンケートのやり方によっては、意図的に結果を操作しうるのではないか。私たちは「法と社会」をめぐる色々な問題を討論する中でそのような疑問を持つに至り、高津高校生を対象に、実験・実証を行おうと考えた。

2. 調査方法

高津高校生1,2年生全員を対象に以下のアンケート項目に関して、特に補足説明をせず、個人が持っている知識の範囲内で回答してもらった。

質問1

以下の条件を満たすとき医師による心肺停止処置を認めること(「安楽死法」)について、あなたはどのように考えますか？

- ・患者が現在の医療では治癒する見込みがないこと。
- ・病気による苦痛が肉体および精神に悪影響を及ぼしていること。
- ・本人が真剣に安楽死を希望していること。

(1. 賛成 , 2. 反対 , 3. どちらともいえない)

質問2

「異性間だけでなく同性間の婚姻を認める法律」(「同性婚法」)を制定することについてあなたはどのように考えますか？

(1. 賛成 , 2. 反対 , 3. どちらともいえない)

以上のアンケート結果の集計が3. 結果の「一回目」のグラフである。

次に、そのアンケートの結果をふまえて「安楽死」については「反対」に誘導するためにそのデメリットを書いたアンケートを、「同性婚」に関しては、「賛成」をより増やすように誘導するためにそのメリットを書いたアンケートを実施した。

そのアンケート結果の集計が3. 結果の「二回目」のグラフである。

なお、誘導するための文章はそれぞれ以下のものを使用した。

(安楽死)

安楽死法が制定されると、患者の家族が莫大な治療費や介護の疲労などの負担から患者に安楽死を促すおそれがあるとも言われています。

あるいは、患者自身が家族に負担をかけているという罪悪感から、一日でも長く最後まで生きたいという本心とは違って、安楽死を希望してしまう可能性があるとも言われています。

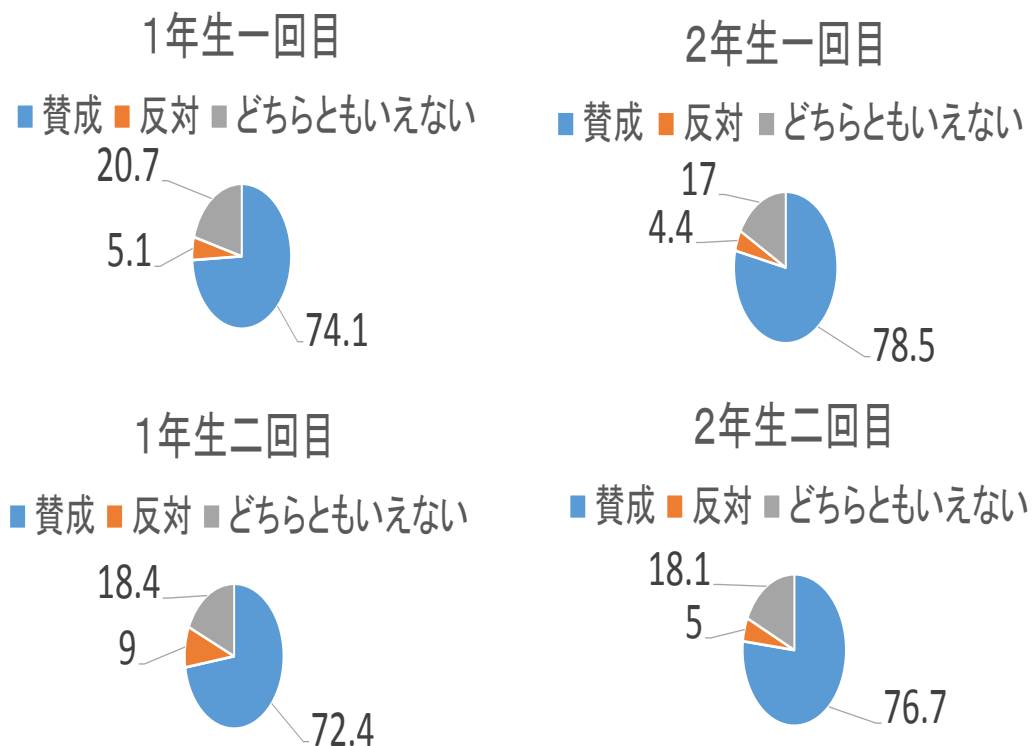
(同性婚)

日本で同性婚を認める法律が制定されると、同性愛が今よりも表立つことになり、日本の少女漫画の世界観が変わってしまうかもしれません。

でも、ウェディング産業の活発化などによる経済の活性化が見込まれています。また、同性愛者という理由だけでたばこを肌に直接押し付けられるなどのいじめを受け、自殺しようとした人もいます。同性婚が法律上認められることによって同性愛者の人達への差別やいじめはなくなります。

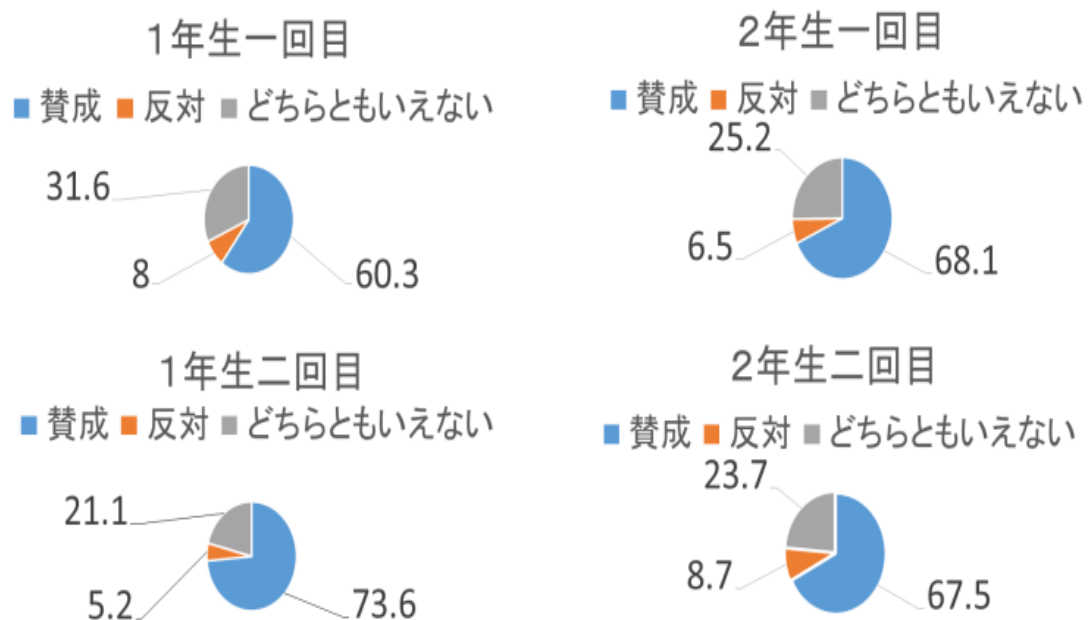
3. 結果と考察

グラフ1：「安楽死」に関するアンケート結果（%）



「安楽死」については、顕著な変化は見られなかった。「反対」へと誘導しようとした試みは失敗したと言える。どうして想定していたよりも誘導された人数が少なかったのかを考えてみた。ひとつは、二回目のアンケートで使用した「反対」に誘導するための具体的なたとえが、インパクトが弱かったのが原因だと考えた。内容に関してよく理解していないと、設定されている状況が分かりにくいような例えであったこと、どんな理由であれ本人の意思を尊重しているとアンケート自体に設定されていたことにより、「安楽死」を認めることによって生じる様々な問題を考えさせ、考えを揺さぶるのは難しかったと思われる。短時間のアンケートで個々の考えを揺さぶり、反対票を増やすのには難しかったのかも知れない。

グラフ2：「同性婚」に関するアンケート結果（％）



「同性婚」については、1年生では、私たちの企図した「賛成」への誘導が成功した。他方、2年生では、逆に「賛成」の割合が減少してしまった。これは同学年からのアンケートということもあり、こちらが誘導していることに気付いた人が“誘導にのるものか”と意見を変えず、むしろ「誘導と反対の方向」へと意見を変えたとも考えられる。

1年生は、2年生に比べると先輩がアンケートを取りに来たということもあり、緊張感を持ってなんの疑いもなく答えてくれたので、誘導が成功したと推察した。

4. 全体の考察とまとめ

一回目と二回目のアンケート結果において、「同性婚」は1年生では誘導が成功し、賛成の割合がかなり増えた。一方「安楽死」において誘導はあまり成功せず、「反対」はほとんど増えなかった。

「同性婚」「安楽死」ともに、一回目のアンケート結果で賛成が多数を占めていた。賛成理由は聞いていないのでわからないが、アンケート対象集団は事前の各自の情報に基づいて、「同性婚」や「安楽死」について肯定的な意見（「賛成」）を潜在的に持っていた集団といえる。対象集団が潜在的に持っている意識が「賛成」傾向であったことから、その潜在意識を後押しするような「賛成」への誘導は容易ではあるが、潜在意識を否定して逆方向である「反対」へ誘導することは難しかったのではないかと考えられる。

このような潜在意識はマスコミなどが行う世論調査と深い関係にある。世論調査はその問題に関してマスコミ報道がかなり行われた後に実施されることが多い。そのため、マスコミが報道する情報によって操作された「世論」を追認する結果になりやすいのではないかと考えることができる。

ただ、今回は「同性婚」と「安楽死」という異なるテーマで比較したので、結果の違いはテーマの違いであったのかもしれない。研究の過程で浮かび上がってきた『マスコミ報道によって形成された潜在意識が世論調査に影響を与える』という新しい仮説を検証するために、今後同一のテーマで最初から潜在意識を形成し、誘導するような方法でアンケートを実施した場合に、結果に差が生じるかどうかを検証してみる必要があると考えた。

5. 参考文献

『データの罠 世論はこうしてつくられる』 田村秀・著 （集英社新書）